

教界ニュース

日本福音同盟 第27回総会

教会ネット軸に被災地支援継続

福島、疲弊する現地教会を忘れない

日本福音同盟(JEA)、JEAは東日本大震災対応安藤成理事長、品川謙一(総主事)は6月4〜6日、静岡県掛川市のヤマハリゾート・つま恋で第27回総会を開き、東日本大震災からの救援・復興を支援し、次の災害に備えることなどを中心とする2012年度事業計画を承認した。そうした中で、2016年に開催する第6回日本伝道会議(JCE6)の開催地を神戸とする意向が明らかになった。被災地支援に際しては、復興活動を支援してき、12年度は引き続き、復興支援にあたることと、復興活動の中心に救援・復興支援に備えることとを承認した。そうした中で、2016年に開催する第6回日本伝道会議(JCE6)の開催地を神戸とする意向が明らかになった。

被災地支援に際しては、復興活動を支援してき、12年度は引き続き、復興支援にあたることと、復興活動の中心に救援・復興支援に備えることとを承認した。そうした中で、2016年に開催する第6回日本伝道会議(JCE6)の開催地を神戸とする意向が明らかになった。

次期伝道会議へ向け宣教フォーラム 仙台で宣教フォーラム

第6回日本伝道会議(JCE6)に向けた取組として、09年札幌で開催されたJCE5の流れの中から、11年は「心のオアシス、リトリート」が開催される。青森と秋田で宣教フォーラムが開催されたが、12年度は6月に女性委員会主催の「心のオアシス、リトリート」が、9月に青年委員会主催の「日本青年伝道会議」が、10月に宣教委員会主催の「宣教フォーラム」が、今年9月17〜19日、東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで「Realize the Young」分かち合う、青年宣教の「Realize」をテーマに、次代を担う人々への宣教とリーダー育成を目指す。JCE6の具体的な開催準備については、4月の理事会で承認した三役(左記事参照)に、開催地委員会委員長、財務担当、渉外担当など3人の副実行委員長を加えて7月に実行委員会が発足する予定。

震災機にネットワークで広がるJEAの協力範囲

1986年の再編・再創立以来、JEAは「聖書に基づいて誤りなき神の御言葉であり、信仰と生活の唯一の基準である」との信仰基準に則して、近年は一致と協力の範囲拡大を指向してきたが、昨年の東日本大震災などの役割も担う。将来的には、外国人の介護士を養成・誘致し、震災で手薄になっている高齢者福祉を立ち上げて地元の雇用創出との相乗効果を促すことも構想にある。

次の災害に備えチャレン養成

JEA援助協力委員会と長年の協力関係にあるワールド・リリーフからの支援により、援助協力委員会とホィートン大学人道的災害支援研究所(HDI)の共同プロジェクトとして、災害対応チャレンプログラムと地域教会の災害対応支援プロジェクトを進めていく。DRCネット、日本救世軍、クラッシュ・ジャパン、今後地震災害が予測される首都圏、東海、関西などと協力する。予算は500万円。またJEAでは、事務機能のクラウド化などの災害対応も進める。

落ち穂

3・11の後で教会は何を聞き、何を語るのか。この大変な問いかけに被災地の牧師が、それぞれの体験の中から答えている。説教者を対象にした雑誌「説教黙想アレティア」(日本キリスト教団出版局)特別増刊号が企画した座談会だ。津波というのは、どうも線を引く災害なんですね。津波が来たところと来なかったところで線が出来てしまふ。線の外にいたか内にならぬか災害の受け止め方が全然違ってくる。それで「ポーターライン・ディザスター」(境界線災害)という言葉を作ってみました。◆そう語るの、実際に津波を体験した新生釜石教会の柳雄雄介牧師。このポーターラインの外にある人も内にある人も、同じ被害に遭って心を痛めているんだという考え方でいます。牧会者の立場で教会員全員の心の傷とどう向き合うか、という課題なのだ。◆この特集には未曾有の大災害の前に成すすべもなく言葉を失い立ちつくし、しかしそのカオスの中で、なおも神の言葉を語り続けようと苦闘する牧師たちの真摯な姿を垣間見ることが出来る。深刻な問題提起はあるが、そこに、明日につながる確かな希望の光が見えるのである。

第6回日本伝道会議 開催地は神戸

JEA第27回総会は2016年に予定している第6回日本伝道会議(JCE6)の開催地を神戸とする意向が正式に決定した。4月23日の理事会では、実行委員長に竿代照夫(イムマヌエル総合伝道団)、プログラム委員長に小平牧生(基督兄弟団)、事務局長に畑中洋人(日本同盟基督教団)の各氏を充てるJCE6三人役人事を決定している。

東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた三陸沿岸に近い岩手県一関市大東町で、廃校になっていた元小学校校舎が中長期的な復興支援のセンターに生まれ変わる。名古屋を中心に在日フィリピン人の支援と伝道に取り組んできたNGOマハリカミッション(大岡潤代表)が、被災地での外国人支援と地域の復興を結びつけようと岩手県内に「マハリカミッションセンター」の設置を計画、廃校の再利用を願っていた地元行政の協力を得て旧内野小学校の空き校舎を借りることができた。

カン リヨ ハシ マシ 廃校を復興支援センターに 宿泊所に改装 ワークキャンプ奉仕者募集



マハリカミッションセンターとなる旧内野小学校の元校舎。上は大岡潤代表。所在地は〒029-0711岩手県一関市大東町大原字高森39-1。献金の宛て先は、郵便振替00880-8-44480 マハリカミッションジャパン

マハリカミッションセンターとなる旧内野小学校の元校舎。上は大岡潤代表。所在地は〒029-0711岩手県一関市大東町大原字高森39-1。献金の宛て先は、郵便振替00880-8-44480 マハリカミッションジャパン

マハリカミッションセンターは、外国人の日本語教育や職業訓練などの教育支援、外国人の定住化を支援する「マハリカミッションセンター」は、廃校をリノベーションして宿泊できるワークキャンプは7月6日〜21日、参加費は1日2千円(食事、ボランティア保険付き)。部分参加や延長も可能。問い合わせは090・1284・7939、maharika@mission@yahoo.co.jp

3・11の後で教会は何を聞き、何を語るのか。この大変な問いかけに被災地の牧師が、それぞれの体験の中から答えている。説教者を対象にした雑誌「説教黙想アレティア」(日本キリスト教団出版局)特別増刊号が企画した座談会だ。津波というのは、どうも線を引く災害なんですね。津波が来たところと来なかったところで線が出来てしまふ。線の外にいたか内にならぬか災害の受け止め方が全然違ってくる。それで「ポーターライン・ディザスター」(境界線災害)という言葉を作ってみました。◆そう語るの、実際に津波を体験した新生釜石教会の柳雄雄介牧師。このポーターラインの外にある人も内にある人も、同じ被害に遭って心を痛めているんだという考え方でいます。牧会者の立場で教会員全員の心の傷とどう向き合うか、という課題なのだ。◆この特集には未曾有の大災害の前に成すすべもなく言葉を失い立ちつくし、しかしそのカオスの中で、なおも神の言葉を語り続けようと苦闘する牧師たちの真摯な姿を垣間見ることが出来る。深刻な問題提起はあるが、そこに、明日につながる確かな希望の光が見えるのである。